

[16]

氏名	花井洋子
博士の専攻分野の名称	博士(社会学)
学位記番号	社博第42号
学位授与の日付	平成27年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	キャリア選択自己効力感の構造と測定尺度の開発
論文審査委員	主査教授 清水和秋 副査教授 川崎友嗣 副査教授 寺田盛紀(名古屋大学大学院)

論文内容の要旨

本論文は、大学生・高校生のキャリアの選択と意思決定の過程に着目し、キャリア支援の現場で活用できるアセスメントツールの開発を目的としたものである。序章では、大学生・高校生にとって学校から職業生活への移行は重要な発達課題であること、社会・経済状況の変化とともにスムーズな移行が難しくなり、卒業後の無業者やフリーター、早期離職などが社会的問題となってきたこと、そのため学校段階の早いうちからキャリアの選択と意思決定に対する支援が望まれるようになってきたことなどを導入として議論した。

第1章では、大学生・高校生のキャリア選択を取り巻く状況について検討し、キャリア支援に適切なアセスメントツールの必要性を関連する文献をふまえながら議論した。本論文では、大学生とともに、就職希望が多く学校経由の就職指導も機能している専門学科である工業高校の生徒を対象として、それぞれのキャリア選択の特徴を実証的な観点から検討することにした。

アセスメントツールの一つで、今もその内部構造について議論されているキャリア選択に対する自己効力感尺度をとりあげ、内外の関連する研究と開発された諸尺度を整理した。この分野での先駆的な研究は、大学生を対象として、N.E. Betzと同僚たちが、J.O. Critesのキャリア成熟理論におけるキャリア選択能力に対応する5次元からなるキャリア自己効力感尺度を提案したことであった。残念ながら、その後の多くの研究は、開発者たち自身の研究でも、この5次元を確認することに成功していない。5次元を求めながらも、1次元とする意見もあり、重要なツールであるにもかかわらず、次元性に関しては混乱したままの状況にあった。

次元性に関しては曖昧性を残したままの中でも、キャリア選択に対する自己効力感と関連する変数についての研究が蓄積されてきた。これらの研究結果を概観し、本論文では、キャリア不決断、パーソナリティ特性のBig Five、不安、自尊感情などの心理学的変数と、キャリア・モデル、親・友人との会話、フリーター観、希望進路、学校での適応などの要因を取り上げ、キャリア選択自己効力感尺度の妥当性という観点から検討することにした。

わが国におけるキャリア選択に関する自己効力感の研究に関しては、N.E. Betzの影響を受けてはいるが、わが国の社会的文化的文脈を考慮し独立した道を歩んでいる。1次元尺

度から11次元尺度という報告もあり、ここでも混乱がみられた。

第2章では、わが国で開発されたキャリア選択に対する自己効力感尺度の項目の整理を行い、J.O. Critesのキャリア成熟理論をふまえながら、独自に5領域を想定し、各領域5項目で合計25項目の質問項目を作成した。大学生を対象として、探索的因子分析を適用したところ、『自己評価』『目標選択』『計画立案』『情報収集』『意思決定の主体性度』からなる5因子を抽出することができた。因子分析結果からキャリア選択自己効力感尺度の5個の下位尺度(各5項目)を構成し、これらの下位尺度の信頼性が.84～.90であることを確認した。

本論文では、キャリア選択の5因子に関して因子間相関ではなく、『自己評価』から始まる因果モデルを構造方程式モデリングにより検討し、適合度の良い結果を得ることができた。そして、大学1年生と2年生を対象とした半年間隔の縦断調査を行い、縦断的因子分析を適用することにより5因子の半年間での安定性と変化をパス係数と因子得点の平均から検討した。その結果、半年間では、キャリア選択自己効力感の安定性は全体的に高く、因子得点の平均でも変化はみられなかった。

第3章では、大学1年生から3年生を対象に、キャリア選択自己効力感尺度の妥当性を、横断的に検討した。ここでは5個の下位尺度を使用し、分散分析により検討を行った。その結果『自己評価』と『情報収集』の平均が大学1年生より2年生で高かった以外に学年間の差は得られなかった。また、『情報収集』においてのみ3年生の男子が女子よりも平均が高かった以外に性差はみられなかった。同じデータでのBig Fiveとの相関分析による結果では、「外向性」が『自己評価』や『情報収集』と、「誠実性」が『意思決定の主体性度』と『計画立案』、「開放性」が『目標選択』『自己評価』と、「協調性」が『情報収集』『意思決定の主体性度』と正の相関を示し、「情動性」が『自己評価』と負の相関を示した。自尊感情はすべてのキャリア選択自己効力感の下位尺度と有意な相関がみられたが、特に『自己評価』と関連が強かった。特性不安・状態不安との関連をみると、いずれの下位尺度も状態不安との関連は低く、特性不安と負の関連がみられた。また、進学、就職、未定の希望進路による群分けで分散分析を行った結果では、『目標選択』『計画立案』『意思決定の主体性度』で、進学希望の学生が就職希望の学生よりも平均が高かった。キャリア選択を行う際にキャリア・モデルをもつことは特に『目標選択』を促進していることなどの結果を得た。この章での重要な結論の一つは、キャリア選択に対する自己効力感を1次元として集約するよりは、多次元尺度でみるほうが、キャリア選択に関してキャリア支援などに活用できるより詳細な情報を得ることができたということである。

第4章では、大学生を対象として抽出した5因子構造を工業高校生でも確認するための分析を因子的不変性の観点から行った。まず、工業高校生を対象とした探索的因子分析から5次元であることを確認し、次に、因子パターンと因子間の関係に関する4水準の因子的不変性を大学生と高校生の2集団同時分析で検討した。その際、キャリア選択自己効力感25項目の因子構造に関して、全体を1次元とする一般因子モデル、5因子とする1次因子モデル、5因子の上位に1個の2次因子を想定した2次因子モデル、そして、5因子間に因果関係を想定した因果モデルの4つのモデルを仮説的モデルとした。構造方程式モデリングに適用したところ、因果モデルの因子パターン不変性の水準の当てはまりが最もよいとの結果を得た。このことにより、キャリア選択自己効力感の次元と因子構造が大学生と工業高校

生が等価あることを検証することができた。

大学生と工業高校生の二つの集団でこの測定が不変であることをふまえて、それぞれの学年間（大学では1年と2年、工業高校では1年、2年、3年）での違いを因子得点の構造平均分析により横断的に比較した。その結果、工業高校生のキャリア選択自己効力感の『自己評価』と『情報収集』は、学年とともに高まっていくが、『目標選択』『計画立案』『意思決定の主体性度』が高くなるのは、就職が眼前となった3年生であった。大学の1、2年生では、まだ、就職活動が始まっていないこともあってか、『目標選択』『計画立案』『意思決定の主体性度』には学年間での違いはみられなかった。

第5章では、工業高校生を対象に、キャリア選択自己効力感尺度の妥当性を検討した。キャリア教育（夏季進路セミナー）を受講することによるキャリア選択自己効力感の変化を3学年の生徒を対象として検討したところ、5個の下位尺度のすべてで、学年の進行とともに平均の値が高くなり、そして、教育後の平均が教育前よりも高くなった。この傾向は『目標選択』で特に強くあらわれた。このキャリア教育の効果が顕著であったのは、1年生と2年生であった。

キャリア選択自己効力感の5個の下位尺度とキャリア意思決定（不決断傾向を測定する7下位尺度）、Big Five（5尺度）、自尊感情との関連について、1年次から3年次まで追跡した縦断的データを対象に相関分析により検討した。その結果、キャリア不決断の下位尺度と自己効力感の下位尺度との負の関連は、不決断の尺度である「相談希求」を除いて、学年が進むとともに強くなった。パーソナリティ特性との関連を同様に相関分析で検討した結果では、『自己評価』と自尊感情、「開放性」との関連が最も強かった。『目標選択』は「情動性」以外のすべての特性と強く関連した。『計画立案』は『目標選択』とよく似た関連を示した。『情報収集』は「誠実性」との関連が強く、『意思決定の主体性度』は「誠実性」と「協調性」と関連した。「情動性」では、1年次で自己効力感の下位尺度全てと正の弱い関連があり、特に『意思決定の主体性度』との間の関連が強かった。

同じ縦断データで、1、2年次での希望進路の変更から5群に分け、反復測定分散分析により検討したところ、1年次に進学を希望した生徒は3年次まで一貫して自己効力感の5下位尺度のすべての得点で高い傾向がみられた。『目標選択』『計画立案』『情報収集』『意思決定の主体性度』では、1年次で進路未定と答えた生徒は、進学群よりも得点が一貫して低かった。なお、『自己評価』は、進路希望とは関係なく学年とともに高くなった。

職業に就くことへの希望の質問から、専門志向の強い生徒と低い生徒に分けて検討したところ、専門志向の強い生徒は、『計画立案』『情報収集』の平均が低い生徒よりも高く、学校満足の傾向も強かった。また、中学以前の職場体験の経験に関して、経験している生徒の方が『目標選択』の平均が高かった。キャリア・モデルがある生徒の方が『目標選択』『計画立案』『自己評価』『意思決定の主体性度』の順でキャリア・モデルのない生徒よりも平均が高かった。職業についての親との会話に関して、親との会話がある方が『目標選択』『計画立案』『情報収集』の平均が高かった。そして、フリーターになる可能性が高いと答えた生徒の『意思決定の主体性度』『目標選択』『計画立案』の平均は低かった。このように、工業高校生のキャリア選択においては、心理学的要因だけでなく、希望進路、キャリア・モデルを持つこと、親との会話等の影響も大きいことを明らかにすることができ

た。

第6章では、以上の結果をふまえた上で、開発したキャリア選択自己効力感尺度について、大学生と工業高校生との結果を比較した。第4章での大学生と工業高校生の横断データによる2集団同時分析からは、『自己評価』から『意思決定の主体性度』のパスは大学生でのみ有意に、また『情報収集』から『意思決定の主体性度』へのパスは工業高校生でのみ有意となり、大学生と工業高校生とでは影響が異なった。第3章での大学生の1年生から3年生の横断的データと第5章での工業高校生の1年次から3年次までの縦断的データを対象にした相関分析の結果を比較した。そこから共通にみえたことは、因果モデルの起点となる『自己評価』が自尊感情と関連が強かったことであった。そして、キャリア選択過程では重要な下位尺度である『目標選択』はパーソナリティ特性の「開放性」、「誠実性」、「外向性」や自尊感情、そして、キャリア・モデルを持つことに関連した。『計画立案』もまた、幅広くパーソナリティ特性（「開放性」、「誠実性」、「外向性」）や親との会話などと『目標選択』よりも少し弱くではあるが関連した。『情報収集』については、親との会話のある学生や生徒の方が高い得点を示した。以上から、キャリア選択の早い時期に目標選択を行い、計画を立てることの重要性を指摘した。また、『意思決定の主体性度』が高いと、逃避することやフリーターになる可能性は低いとみられ、目標への意志を強く持つことがキャリア選択の過程では重要であるといえる。

以上の結果をふまえ、最後に、本論文で開発したキャリア選択自己効力感尺度の活用として、生徒・学生自らによる自己診断や個別のキャリア・カウンセリングでの生徒・学生のキャリア選択状況や心理的状態のアセスメントとその結果のフィードバックなどについて議論した。そして、キャリア教育の効果測定などでの活用とその結果に基づいたキャリア支援に関して提案を行った。

論文審査結果の要旨

キャリア選択自己効力感の測定に関して、米国でもわが国でも、その次元性については一次元と多次元との間で混乱があった。その原因が次元の探索と確認のための方法論の適用が不適切であったことを明らかにし、欧米の項目の翻訳ではなく、わが国のキャリア選択場面に適切な項目の表現を特定することの必要性を議論している。さらに、発達過程での変化の軌跡をとらえるために横断的調査に加えて縦断的調査の必要性も議論している。そして、最新の方法論による次元性の確認と測定の妥当性の検証の道筋を明快に論じている。問題意識は明確で、問題の設定も適切であると評価できる。

キャリア選択自己効力感に加えて、キャリア意思決定・キャリア発達・キャリア教育などに関する内外の文献を徹底的に検討し、先行研究の知見を十分に整理し、その問題点を明確にしている。内容の豊かな文献展望は、キャリア関連の研究者に有益な情報を提供してくれる。

分析においては、分散分析法など心理学研究における基本的な手法を堅実に用いているだけでなく、探索的因子分析と確認的因子分析そして複数集団の同時分析や因果分析の使用は追求する問題や目的に照らして的確でかつ正確である。分析結果の解釈も同様に適

切である。

本論文は、序章に続いて第1章で大学生と高校生のキャリア選択に関して、理論的研究・実証的研究を徹底的に網羅し、多角的な立場からの測定の必要性を明確にしている。そして、第2章と第3章では大学生を対象に、キャリア選択自己効力感の次元の探索・検証と妥当性の分析を行い、第4章では大学生の次元が高校生でも不変であるかを検討し、この結果を踏まえて、第5章で高校生を対象とした妥当性の検討を行っている。以上の実証的な研究成果のキャリア支援などへの応用を第6章で論じている。この論文の章の構成は的確であり、明解性を一定の水準で保った文章の表現と議論の展開、そして、実証的な研究成果との関連づけは秀逸である。論理の一貫性について特に重大な問題点は認められない。全体を通じた議論の展開には説得力がある。

本論文の独創的な点は、キャリア選択自己効力感に関する項目を独自に作成し、その次元性を探索的因子分析により明らかにし、大学生と工業高校生を対象としてその因子的不変性を検証したことにある。そして、5次元の因子を対象に信頼性の高い尺度を構成し、その妥当性に関して、横断的・縦断的な研究方法を駆使して、学術的価値の高い知見を導き出した。ここから独創性と高い研究能力を読み取ることができる。また、研究法と分析法の縦横な駆使は方法論の熟達を窺わせる。

本論文は、キャリア支援の実践において、多角的アセスメントツールの活用の立場に立っている。キャリア選択自己効力感を5次元で取り扱うことの有効性を、多様な側面から検討した尺度の妥当性研究から明らかにしている。尺度を刊行するには規準集団を設定した標準化の手続きが課題として残されているが、多面的に、そして、決定の過程を因果的な流れの中でアセスメントするという斬新なアイデアは、この分野の実践に貢献するものと高く評価することができる。

このように、本論文は適切に構成され、全体的にわかりやすい文章で表現されている。問題設定や概念的枠組みの設定、調査票の設計と調査の実施、データ分析による結果のまとめと考察というすべての点からみて、博士論文として一定の水準に達している。よって、本論文は博士論文として価値あるものとみとめる。